まちの誇り ふるさとの自慢

那珂川町ならではの特産品をこれからも

江戸時代から続く伝統の技を今に伝える「小砂焼（こいさごやき）」

「小砂焼」は日本最古の砂金の産地と伝えられる本町の小砂地区から焼物に適した陶土が発見されたのをきっかけに、水戸城下の御用窯で日用の器が焼かれたのが始まりです。

その後、小砂地区でも水戸藩御用陶器が焼かれるようになり、幾多の変遷を経て、現在に至っています。黄金の光を放つ砂金を思わせる金結晶の陶器をはじめ、青磁、白磁など様々な種類が九軒の窯元で製作されています。また今でも暮らしの中で使える皿や碗、壺などを生産しており、「栃木特産百選」や「県伝統工芸品」にも指定され、幅広い人気を集めています。小砂焼体験センター「陶遊館」では、手びねりや絵つけなどを気軽に体験でき、町内外の人々にも喜ばれています。

体験

▲陶遊館

ひと味ちがう風味「八溝そば」

地元産のそば粉を使った名物そば。「霧ケ岳山村文化体験村」や「御前岩物産センター」ではそば打ちの体験教室を開催。観光客にも大変喜ばれています。

体験

御前岩物産センター

小川の銘酒◀

地元産の米や花酵母を使って日本酒の他、近年では地元で栽培された芋や麦を使った本格焼酎も販売されています。

ばとうワイン▼

地元で採れた果物を使ったワイン。イチゴやプラム、キウイフルーツといった珍しいワインは、お土産としても好評です。

伝統の味と技に新たな特産品をプラス

本町には豊かな自然やこの町ならではの歴史と文化に育まれた特産品が数多くあり、それがまちの誇り、ふるさとの自慢になっています。これからも伝統の味や技は大切に守りながら、官民一体となって新たな特産品の開発にも力を注いでいきます。

The town has a large number of specialty products deriving from nature, history and culture. culture. These are on sale at facilities such as the Bato Michi-no-eki Roadside Station. We will continue to pour our efforts into making attractive specialty products.

人と人が出会い、小さな心の交流が始まる「道の駅ばとう」

農作物直売所や地元の特産品コーナー、レストランなどを完備した「道の駅ばとう」は、人と人が出会い、小さな心の交流が始まるふれあいステーションです。館内には地元で作られた新鮮な野菜や果物、特産品などが所狭しと並べられ、観光客とのやりとりでいつも活気に満ちています。

また、同じ敷地内には「馬頭観光センター」があり、町と観光客をつなぐ拠点になっています。

那須神田城跡（国指定史跡）

那須氏の祖である須藤権守貞信の築城によるものとされ、源平屋島の合戦で扇を射落とした那須与一宗隆の生誕の地と伝えられています。

那珂川町ふるさと館

小川地区の歴史遺産と自然をテーマにした文化交流施設で、建物はクギを一本も使わない匠の技を駆使した早川式かんざし工法で2階建ての大型木造建築になっています。

匠の館（小口家復元民家）

江戸時代の様式を今に伝える復元民家で、昔ながらの暮らしを見学でき、子どもたちの学習の場としても利用されています。

民俗資料館（永森家復元民家）

農具や生活用品など、この地に伝わる民俗資料を数多く展示した資料館で、当時の暮らしを垣間見ることができます。

那須官衙遺跡/鐙瓦

駒形大塚古墳/画文帯四獣鏡

那須八幡塚古墳（国指定史跡）

那須八幡塚古墳出土鏡

伝説

小川

「鳥　森」

那須与一が子供の頃のこと、恩田の鳥森で兄たちが弓の稽古をしていました。鳥の巣を射ようとして兄が放った矢は巣に届きません。

与一は「自分ならできる」と進み出ました。兄たちは「与一が兄の強い弓をひけるはずがない。まして鳥の巣を射落とせるはずがない」と大笑いしましたが強く言うので与一の腕をためすことにしました。与一は兄の弓を取って矢を放ちました。矢は巣を少しそれてしまいました。だが与一は「おれは巣ではなく、巣の中の卵をのもうとしていたヘビをねらったんだ」と言いました。

「地元の話を語り継いで
まほろば語り」

兄たちは信じませんでしたが落ちた矢を拾いに行くと、そこには腹に矢が突きささったヘビがいました。

与一は「今度こそ落としてみせる」と言い、矢はみごとに巣にあたりました。木の下の草の上には鳥の巣がそっくり落ちており、しかも中の卵は割れていません。兄たちは与一の腕前におどろきました。

これを聞いた父資隆（すけたか）は与一を呼んで木刀を渡して立合（たちあ）いました。この立合いで、与一がひそかに武術を学んでいたことを知り、これまで余り者扱いし、父として何もしてやらなかったことに気づき、資隆（すけたか）は与一を抱き上げました。そしてヘビから卵を守り、割らないように巣を射落とした与一の思いやりと腕前をたいそう誉めたたえました。

それから与一は余り者ではなくなり、父や兄たちと共に武術の稽古に励んだということです。

※1立合い…互いに戦うこと

古代から延々と続く人々の営みを知る

歴史に学ぶ、この地域の成り立ち

なす風土記の丘資料館

「なす風土記の丘資料館」

那珂川流域にはたくさんの文化遺産が残されています。これらの遺産と環境を保存するために栃木県が整備したのがこの資料館です。館内には、「甦る那須古代文化の軌跡」をテーマに、縄文時代から奈良、平安時代にわたり特色ある那須の歴史と文化を紹介するとともに、「火起こし」や「勾玉づくり」などの体験講座もあります。

「駒形大塚古墳」（国指定史跡）

関東地方で最も早い時期に造られたことで知られる前方後方墳で、内部からは後漢（中国）時代の鏡「画文帯四獣鏡」をはじめ、鉄刀や鉄斧など多くの鉄製品や銅鏃、ガラス小玉、土師器などの豊富な副葬品が出土しています。このことから、生前の埋葬者はこの地でかなりの権力を持っていたものと思われます。

「那須八幡塚古墳」（国指定史跡）

古墳時代前期に築造されたといわれる古墳で、昭和28年（1953）に行なわれた発掘調査では中国製の鏡「夔鳳鏡」をはじめ、鉄斧や鋸、短剣など、さまざまな副葬品が発見され、東日本でも極めて重要な古墳として注目されています。

「那須官衙遺跡」

昭和15年（1940）にこの地で発見された1本の銅印をきっかけに発掘調査が開始されました。当初は寺院跡と思われていましたが、広範囲にわたって役所や倉と見られる建物跡が確認されたことから国内最大規模の官衙（那須郡役所）跡であることが明らかになりました。奈良、平安時代の役所の様子を知る上で、大変貴重な遺跡として知られています。

那須官衙遺跡から出土された銅印

瓦・尾の草遺跡出土

高杯・駒形大塚古墳出土

人面把手付土器・浄法寺縄文遺跡出土

【郷土資料館】

小川郷土館

馬頭郷土資料館

なす風土記の丘資料館 TEL0287-96-3366

唐の御所（国指定）（和見）

古墳時代後期の豪族の墓で、平将門ゆかりの姫がこの地に隠棲した際、唐土帝王の后であると名乗ったことからこの名が付きました。

古代産金の里と健武山神社（健武）

奈良時代、この地域は砂金の産地として知られ、東大寺大仏建立の際に金を献上するなど、古代律令国家の形成にも貢献していました。

諏訪神社（富山）

江戸時代の寛永18年（1641）に信州の諏訪神社から分霊、建立された神社で、社殿に施された精巧華麗な彫刻が有名です。

武茂城跡と静神社（馬頭）

武茂城は、武茂氏の祖・泰宗が築城したと伝えられ、城跡の中腹には155段の石段がある静神社が鎮座しています。

馬頭院とその境内にある三度栗

「馬頭院（ばとういん）」

黄門様として馴染みの深い第二代水戸藩主・徳川光圀公ゆかりの寺で、町内の馬頭という地名は本尊の馬頭観世音菩薩に由来しています。

また、境内には光圀公が手植えしたと伝えられる「枝垂栗（しだれ）」の巨木が今も残り、年に3度開花することから地元では"三度栗"と呼ばれています。

本尊の馬頭観世音菩薩は、白馬を頭に載せているところから馬頭観音とよばれています。三面六臂（ひ）の木彫金箔立像で、平安時代の作と伝えられています。

馬頭観世音菩薩立像

伝説 馬頭

「水戸様御乗馬の碑」

武茂の庄が、水戸頼房公の領地になりましてからは、代々の藩主の小口、小砂の領内御巡視がたびたび行われました。水戸家にとっては、この地方は他領との国境でもあり那珂川は産業上重要な水路でもあったからです。

時の藩主治紀公も馬頭、小口、小砂地内を御巡視なされ、その時はいつも栗毛の馬にまたがって、百姓町人などとも親しくお話しになられては善政をしかれておりました。

水戸様が御巡視の折りお乗りになる馬は、小砂の島田家でお預かりして飼ばを吟味し、毛並みを整え一家をあげて育て、島田家では、それを大変名誉にしておりました。

「地元の話を地元の言葉でまほろば語り」

ある日、島田家に予想もしなかった災難がおとずれました。それは火災だったのです。火は燃え広がり屋根も柱も一面の火の海となってしまった。赤黒い炎、渦まく煙、その中から人々はハッと我れに返る悲痛ないななきを聞いたのです。泣き叫ぶその声はほかならぬ水戸様お預かりの栗毛の馬です。

人々はあれよあれよと立騒ぐばかりで救い出す手だてもないまま、あわれ水戸様のお馬は焼け死んでしまいました。

小口長峰の高台に「水戸様御乗馬墓」の石碑が建てられています。文政五年九月二十六日、施主善兵衛ときざまれた馬の供養碑です。この部落の人々は、それ以来、栗毛の馬は飼わないことになったといいます。

夕暮れ時、この長峰の道を歩いている時、カッカッカと馬がかけてくるひずめの音が後から聞こえるので、振り向いて見ても馬の姿が見えないことがたびたびあったと言い伝えられています。

時代を築いた先人たちの足跡を辿る

日本の心にふれる、先人の思いにふれる

鷲子山上神社

先人たちの足跡を辿る―。それはこの地域の成り立ちを知り、未来に向けた指針を立てる壮大な旅でもあります。

古くから独自の文化が育まれていた古墳時代、古代那須地方の政治・文化の中心だった奈良・平安時代、水戸徳川藩によってさまざまな産業や文化が花開いた江戸時代…。

この町に残る史跡や文化財にふれることで、これからのまちづくりに思いを馳せる―。町の歴史は、日々の営みのその先に未来があることを教えてくれます。

乾徳寺

「鷲子山上神社」

標高460m余りの「鷲子山」山頂にあるこの神社は、大同2年（807）の創建と言われる古社で、本殿や随神門は再建ながら、彫刻や装飾の豊かさは他に類のない貴重な遺構として知られています。

また、境内には樹齢千年と伝えられる杉の大木や原生林が生い茂り、「21世紀に残したい日本の自然百選」にも選ばれています。

「乾徳寺」

この寺は、中世、この地に城を築き、長きに渡って統治してきた武茂氏一族の菩提寺です。

室町時代の様式を伝える千鳥破風の山門は武茂城の大手門を移築したものと伝えられ、境内にある武茂氏一族の墓碑などとともに、人の世の栄枯盛衰をしのばせる趣のある寺です。

「三和神社」

推古天皇12年（604）の創建と伝えられる神社で、『続日本後紀』によると承和5年（838）には官社となって国司の奉幣社（国司が神に幣束を奉げる）となっていたようです。

毎年正月14日の夜には鳥越神事（どんど焼き）が行なわれ、多くの人々で賑わいます。また、永禄年間（1558～69）から伝えられたと言う「天祭り」は一時途絶えたものの、後継者の育成を行い、受け継がれています。

三和神社

A large number of valuable historical and cultural heritage sites remain here and there throughout the town, as though to tell the story of the town from the Kofun era to the present day. We will continue to preserve the history and culture shaped by our ancestors.